

『a v e x r a v e ' 9 4』 最先端のイベント

少し前の情報ですが、' 9 4 年 8 月 2 9 日に史上初の画期的なイベントが行われたので御報告致します。

これは今回レビューが掲載されている" Velfarre"の親会社である" a v e x t r a x"主催による大規模なコンサート/ディスコイベントであり、自社がCDやレコードでリリースしているミュージシャン15グループを欧米や日本から集結させ、東京の"東京ドーム"という5万人規模のスタジアムにて5億円程の制作費(ハイビジョン系統等は含まず)をかけて行われました。このような規模のライブイベントは同社が' 9 3 夏に行った物に続く第二弾の催しであり、' 9 3 と同じく入場無料(同イベントに関連したCD添付の入場券が必要)にて行われました。

まずこのような大規模なイベントが入場無料にて行われるというのは世界的にも類を見ない事ですが、2度目を迎えた今回の画期的な内容は、Hi-Vision 3D映像及び4チャンネルサラウンドサウンドを複数(4回線)の衛星回線を使用した生中継にて、日本の主要な大都市である北海道、名古屋、大阪、福岡の4つの特設会場にリアルタイムに伝送(Closed-Circuit)し、それぞれの会場に設置された4チャンネルサラウンドPA装置と複数の巨大スクリーンへのプロジェクターへの3D投影により、来場者はあたかも"東京ドーム"の会場にいるかのようにライブを堪能する事ができた事です。

開演から終了までの3時間半の間、途中DJのブレイクを挟みながら<Cappella/Bananarama/The Prodigy/2 Unlimited/Praga Khan/Urban Cookie Collective>他欧米の著名なテクノハウスアーティストや<trf>や<mc A.T.>等自社で抱える日本のミュージシャン等15アーティスト/グループによりノンストップにて行われたこのディスコ・ライブイベントは、ディスコという空間がそのまま巨大な規模に発展した様相を呈しており、このスタジアムで行われるコンサートで通常使用される量を超える照明機材と、バリライト等幾つものムービングライト、複数のレーザーディスプレイ装置、又通常のコンサートを上回る規模のPAシステム(低域増強)にて巨大な空間の演出が行なわれました。大規模コンサートと同等のステージが組まれた他、アリーナには"スーパーダンスマウンテン"という巨大なやぐら(写真参照)が生まれ、500人ほどの特別に選ばれた過激なファッションに見を包む女性客が止まること無く踊り狂っていました。やぐらに上ることが出来なかったアリーナの客は勿論、2階や3階席といったステージのはるか遠くに陣取った5万人近くの観客も思い思いのファッションでこの巨大な"ディスコ"を体験していました。

今回世界初の試みとして" a v e x r a v e ' 9 4 ハイビジョン3D同時体感ライブ"という、ハイビジョンシステムを使用しさらに3D映像をリアルタイムで伝

送するという、『新しいメディアを a v e x 独自の方法で、技術をエンタテインメントに昇華させるという考えにより、ソフト的なアプローチで新しいメディアを構築する（実施概要書より）』という事が行われ、郵政省（Ministry of posts）や（社）ハイビジョン推進協会（Hi-Vision Promotion Association, Inc.）、（財）ハイビジョン普及支援センター（Hi-Vision Promotion Center）の後援の元幾つもの初の試みが行われました。

メイン会場である”東京ドーム”に配置された15台（内10台を3D用に2台一組を専用の3D Tripod（三脚）で5系統使用／その内4系統にはズーム機能搭載）のハイビジョンカメラと特別に設計されたスイッチャーによりそれぞれ場内の巨大なディスプレイへの投影（ジャンボトロンやMOOBTRON等300インチ以上クラス6系統）やBS放送の為の記録（NHK-BS放送によるオンエア済／7系統のHDTV-VTR）、ビデオパッケージやCD-ROM等の制作の為の記録（9系統のNTSC-VTR）、そして放送衛星（Super Bird A）への送信の為のSNV（earth station vehicle=衛星アップリンク車載局／今回国内の3台全てを使用）への伝送（MUSE方式2ch及びデジタルコーデックによる帯域圧縮伝送方式2ch／デジタルコーデックシステムは国内の2台全てを使用）が行われました。また音声に関しても8グループ4チャンネル出力（Joystickコントロール）の立体音声卓が”ハイビジョン3D実行委員会”の技術協力の元新たに開発され、通信衛星及びハイビジョンAモードでの”DANCE”伝送方式というデジタル音声圧縮による高品位伝送により、各中継地点に4チャンネルサラウンドサウンドを再現させました。

”東京ドーム”よりuplinkされた立体映像及びサラウンド音声は、各方式（東京-大阪間のみデジタルコーデック／他はMUSE方式）により札幌のディスコ”KING XMHU”（北海道）、名古屋のディスコ”KING&QUEEN”、大阪”TWIN21”特設会場、福岡のディスコ”MARIA CLUB”の各会場で地元のテレビ局やNTTなどの移動衛星放送受信車によりdownlinkされ、それぞれの会場に設営された4チャンネルサラウンドPAシステムと複数の巨大3Dスクリーン（札幌3面／名古屋2面／大阪3面／福岡3面の11面に30台のハイビジョンプロジェクターが使用された）に再現されたのです。これらの映像は偏光板方式（Polarized 3D）による投影で、偏光メガネを掛けることにより立体視を得ていました。これらの体感システムによりそれぞれの会場に集まった人数を含めると、6万人近くがこのイベントを”同時体験”しました。

今回のイベントは単なる巨大なディスコイベントではなく、これらの革新的な先端技術が幾つもの実用的なレベルで応用され、臨場感と同時性による”参加型”イベントでのハイビジョンシステムの応用の可能性の実証が行われたという点と、単独のイベントがBS放送やビデオパッケージ、CD-ROM等様々なメディアに再使用されるといったワンソースマルチメディア展開の素晴らしい発展性を得る事が可能であるという点で、過去のイベントの概念を書き替えてしまいました。又このイベ

ントを可能とした a v e x t r a x の企業としての姿勢も称賛に値するでしょう。来年には更に進化したイベントが開催される事が望まれます。

今回のイベントは既存のディスコやディスコに関わる関係者にとっては一見無縁な様々な先端のシステムが使用され、又イベントや放送の歴史に残る画期的な催しでしたが、様々な可能性を示唆しています。先ずダンスレコードレーベルが国（郵政省他）の後援の元このようなイベントを行うことができた事。入場料という形を取らなくとも（たとえその入場券を入手するためにCDを購入しなければならないとしても入場料相当分は無償であった）このような規模のイベントを行う事が可能である事（協賛や後援、ビデオ素材としての販売や放送プログラムへの使用料、又無償で得られる莫大な費用に相当する広告効果等により）、ハイビジョンに代表される高品位な映像・音声の伝送（日本では今後B・I・S・D・Nの実用化が進められている）による遠隔地へのリアルタイムな伝送により、臨場感や同時体感を複数の場所を得る事が可能な事、様々なイベントのマルチメディア展開の可能性等であり、強引かもしれませが、例えばディスコという空間が様々なメディアに発展していく事のできる可能性も十分に考えさせられました。

ディスコという空間が持つ性格やイメージは、国毎に微妙に異なりますが、共通しているのはその特殊な空間を享受する為にそこに向いて行く必要がある事でありこの点では今後時代が進んでもディスコという空間の存在意義は十分にあります。その一方で”トータルリコール”のようなヴァーチャル・リアリティー世界の中に存在するディスコ（やコンサート会場等）というのも今後登場して来ないとは言いきれません。今回の a v c x r a v e ' 9 4 ではその可能性を十分かきみする事もできました。イベントではなく恒常的なシステムとしてそれが成り立つかどうかは現状では難しい問題ですが、今後更に技術が進化を遂げていけばきっと現実的な物に成るでしょう。

そのような時代を迎えても尚ディスコという空間が成り立っていく為には、様々な音響・照明・内装等のハードウェアによる演出は勿論、DJやアーティストによるソフト面の演出の独自性も当然必要であり、ディスコという空間の特殊性を様々な工夫により、より高めていく必要があります。これらの苦勞無くしては今後淘汰されていくことは必至でしょう。特に日本ではこの傾向が非常に高く、例えば劇場映画はレンタルホームビデオに駆逐されてしまっています。劇場という空間で味わう感覚（巨大なスクリーンとサラウンド等の臨場感を含んだ音による）よりも、“カウチポテト”等の言葉に代表される家庭で見る気楽さを選択する人口が非常に多くなってしまったという事です。映画館とディスコでは、そこへ訪れる者の積極性や目的は大きく異なるかもしれませんが、今後人々を取り巻く娯楽環境が進化していくに従い、そうも言えなくなる状況が必ず訪れると考えられます。そんな時代に生き残る事の出来るのは、きっと今この文章を衝撃的に受け止めているあなたです。